

氏 名 古明地 樹

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 2293 号

学位授与の日付 2022 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本文学研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 橘守国絵本の研究—柏原屋の絵本出板活動と橘守国の作
画法を軸に—

論文審査委員 主 査 木越 俊介
日本文学研究専攻 准教授
入口 敦志
日本文学研究専攻 教授
山本 嘉孝
日本文学研究専攻 准教授
浅野 秀剛
大和文華館 館長
佐藤 悟
実践女子大学 文学部 教授

(様式3)

博士論文の要旨

氏名 古明地樹

論文題目 橋守国絵本の研究—柏原屋の絵本出板活動と橋守国の作画法を軸に—

本論は、近世中期の上方における絵本流行の実態解明のため、その流行の中心的役割を担った絵師の一人である橋守国と、橋守国の作品の多くを出板した書肆である柏原屋に着目し、絵師と書肆それぞれの特徴から、橋守国の作品を分析する。

「絵本」とは、絵の手本を意味する語で、絵師が作品を描く際に参照するものとして用いられたほか、絵師以外の読者が絵画的素養を身につけるために用いられた。近世期における視覚文化の基盤は1000種を超えて出板された絵本によって整えられ、近代以降もその出板は継続する。これらの絵本出板の実態を解明すること、即ち〈絵本史〉を構築することで、日本の視覚文化の実態解明に資することが、筆者の最終的な目的である。

先行研究の多くは、浮世絵研究の観点から、浮世絵師ごとに作品を分析する方法を採用してきた。これによって多くの知見が得られたが、名前の載らない絵師や、無名の絵師が制作した絵本には、書誌学的調査等の基礎的研究が及んでいないという課題が残る。

また、浮世絵師ごとに作品を分析する手法は、近世絵本の出板過程をやや軽視する手法である。近世絵本の多くは、板元の依頼によって絵師が制作を行うという過程で制作されるため、絵本は、絵師の他、板元の出板活動によって特徴づけられるはずである。絵師を基準として分析する手法は、板元の出板活動に由来する絵本の特徴を、絵師の特徴に由来するものと誤解する危険性がある。

これに対し、本論では、書誌学的調査に基づく板元を基準とした絵本整理、及び板元と絵師の2つを軸とした作品分析という手法を考案し実践する。板元が出板した絵本を総合的に取り上げることで、著名な絵師の作品に偏らない絵本整理を行い、板元の出板活動を考慮することで、より正確に作品分析を行うことを目指す。

〈絵本史〉の構築という最終的な目的達成に向け、本論では、以上の考えに基づき、近世中期の大坂で活躍した板元である柏原屋を基準として絵本の調査と整理を行い、その柏原屋と絵師である橋守国の2つの面から作品の分析を行う。

延宝期、元禄期の絵本出板流行に次いで、享保期から宝暦期頃にかけて、上方を中心とした絵本出板の流行が生じ、出板件数が俄かに増加する。この時期に大坂で大規模な絵本出板を行っていた板元が柏原屋である。柏原屋は、狩野派絵師による絵本の他、多数の小袖雛形本の出板に関わった。

その柏原屋は、狩野派絵師である橋守国絵本の出板に力を入れていた。特に『絵本写宝袋』『絵本通宝志』『絵本直指宝』といった守国画作の絵本群は、鈴木春信ら浮世絵師をはじめとして、多くの町絵師に参照され、近代まで板を重ねた。

本研究は、この柏原屋が出板した絵本を対象に、書誌学的調査を行い、柏原屋による絵本出板について整理を行う。そして、柏原屋の出板活動に認められる特徴を明らかにする。そして、柏原屋の特徴と絵師である橋守国の特徴を踏まえて、守国画作絵本群の分析を行う。これによ

り、近世期の出板文化を踏まえた、より正確な守国絵本群の分析を行い、〈絵本史〉における一つの基準として位置付けることを目指す。この研究方法の過程に準じ、本論を第1部、第2部に分け、第1部では柏原屋を軸とした絵本整理、及び柏原屋の特徴分析を行い、第2部では橋守国を軸とした作品分析を行う。

第1部では、まず柏原屋が絵本出板を開始する最初期の活動実態を、伝本調査から考察した。これにより、求板本を基本として柏原屋は蔵板書を蓄え、後にこれらと小袖雛形本を含めた、模様取りを目的とした絵本出板という、柏原屋の絵本出板における1つの軸が形成される。

また、絵本蔵板目録の分析により、柏原屋の絵本出板が、守国作品に見られる啓蒙的作品、春卜らの粉本的作品、これらとは異なる模様取りのための作品を軸に展開されていたことを明らかにした。この3つの作品的特徴に合わせ、柏原屋は絵本の書型等を変えており、現代における製造ラインに類した出板を行っていたと考えられる。

さらに、柏原屋が大坂における絵本出板書肆としての立ち位置を得る過程に複数の類板に関する訴訟があったことを指摘し、絵本類板の訴訟がどのような論理で判断を行ったのか、その訴訟を柏原屋はどのように利用したかを考察した。これにより、近世中期の上方における絵本の類板訴訟において、画題の重複度合いが1つの判断基準として問われていた可能性が見出された。柏原屋は、この基準を利用し、他書肆が出板する作品を牽制していたと考えられる。

第2部では、橋守国が柏原屋による依頼を受け、板本という媒体に狩野派の知識をどのように活用したのかを考察する。

まずは、橋守国画作の作品『絵本写宝袋』『絵本通宝志』『絵本鶯宿梅』『絵本直指宝』の四作品を対象に、守国が和漢の画題をいかに描き分けていたかを分析した。守国がこれらの差異を、板本のレイアウトによって表現していることが判明し、上文下図形式を和画題、上図下文形式を漢画題に利用するなど、工夫を行っている。この特徴は、板元を跨いで確認されるものであり、守国作品以外に同じ特徴を認めがたいことから、守国独自の特徴と認められる。

また、『写宝袋』及び『通宝志』の分析により、守国が読者の需要を見極めて図様を改変していたことが明らかになった。即ち、板本を粉本として活用する絵師は、基本的に浮世絵師をはじめとする町絵師であり、その画業は庶民層を対象とするものである。守国は、『通宝志』巻五において「賢聖障子」図という紫宸殿に描かれる画題を取り上げているが、これらを町絵師が描く事はない。そのため守国は、絵画的教養として「賢聖障子」を取り上げながら、狩野派に継承された肖像画的図様と、故事に根差した図様を取り合わせて、活用可能な図様を提示していることが判明した。

同様に、守国が読者層の需要を意識して作画を行っていた例として、『写宝袋』における『前太平記』の利用が認められる。守国は、元禄期に成立した平仮名百十三図本『前太平記』を利用し、図様の拡大と省略を行うことで、粉本として活用可能な作画を行った。後に、鈴木春信らが『写宝袋』の図様を利用したことが既に判明しており、画題の変容過程における大きな転換点として、守国が行った改変作業が大きな影響を与えていることが判明した。

これらの考察から、各絵本の特徴に、板元の出板活動が大きく影響していたことが明らかになった。先行研究では、守国作品を啓蒙的配慮に富む作品と位置付けていたが、これは絵師である守国ではなく、柏原屋の出板活動に認められる特徴がもたらした可能性が高い。このことは、他の絵師による作品の再考が必要であることを意味し、板元を基準とした絵本整理の必要性を強調する。

博士論文審査結果

Name in Full
氏名 古明地 樹

Title
論文題目 橋守国絵本の研究—柏原屋の絵本出板活動と橋守国の作画法を軸に—

出願者は本論文を通して、板元の依頼によって絵師が作品制作を行うという過程を重視し、絵師ごとに作品を整理し研究するだけでなく、板元ごとに作品を取り上げ、書誌学的な整理を行うことを重視する研究姿勢を貫いている。全体として、江戸時代の絵本をめぐる諸問題に対し、様式や画題ならびに絵本史の展開の把握に新たな問題を提起した高い価値を有する論考であると評価できる。

まず「序論」において先行研究の整理と本論全体のねらいが記され、従来の絵本研究の課題、具体的には著名な絵師のみを中心とすることの問題点が指摘される。こうした状況に対し、著者は板元の出板戦略に着目し、書誌学的な整理を通して絵本研究の刷新を目指すことが示されている。

本博士論文はこうした展望を受け大きく二部立てとされ、さらにそれぞれ三章ずつ論が収められる。具体的には、前半は柏原屋、後半は橋守国という、ともに十八世紀の大坂において活動した本屋と絵師を研究対象の中心に据えている。

以下、内容について章ごとに評していく。

第1部は「柏原屋の絵本出板活動」と題され論が展開される。

第1章「初期柏原屋絵本群の成立」は、柏原屋清右衛門板の初期絵本類8点を書誌学的に整理した結果、すべて求板物である可能性があり、その獲得が絵本戦略の出発点だったことを明らかにした。柏原屋の絵本類は板木の部分的再利用といった特殊な事情が複雑に絡み合っているのみならず、出版関係の記録類から判明しないことがらが多く、関係資料の残存状況も十全とはいえない中で、現時点での立論にあたっての論者のアプローチには妥当性があると思われる。なお、論の整理のために末尾に付された図が極めて効果的に読者の理解を助けていることも付記しておく。

第2章「柏原屋による絵本分類」は、副題に「絵本蔵板目録を中心に」とあるとおり、巻末などに広告として記載される蔵板目録に注目し、まずは複数のバリエーションに整理、その上で記載されている各書の書型や内容的な傾向から分析・分類を試みたものである。その結果、柏原屋が携わった絵本作品の特徴を、1) 染物類などの図案集、2) 古画を模写した画譜・絵手本、3) 注釈を施した画題・図様解説書の三種類に分けて見出した点は十分に納得のいくものであり、さらに、この三種を書肆が自らの出板戦略として自覚的に区別していたことを、絵本史の大きな流れの中に位置づけようとする姿勢も、絵本研究そのものに資するところ大である。

第3章「柏原屋による絵本類板訴訟」は、柏原屋が関与している複数の類板記録において争点となっている具体的書目を取りあげ、そこから柏原屋の戦略を見出そうとする。一般にこうした記録そのものには類板か否かの結論に至る過程が必ずしもこと細かに書かれ

ているわけではなく、時には判定の結果すら記されないものもあるが、残された資料群と記録の断片を根気よく丹念につき合わせることによって問題の核心に迫ろうとする。概念的にはいまだあいまいな点が残されていた絵本における類板の定義を、柏原屋が積極的に訴訟を行うことによって自らの絵本出版に有利なものに引き寄せていったこと、具体的には絵として描かれる対象物の同一性が類板と判断される重要な要素となったことが明らかにされる。以上の論証過程においては図版が多く示され、説得力を強めている。

第2部は「橘守国画作絵本の分析」と題し、柏原屋の絵本において主力の商品となった『絵本写宝袋』『絵本通宝志』などの画師の画業を出板物を通して分析する。

第4章「橘守国の絵手本作品における画題の和漢分類意識」は、『絵本写宝袋』とその周辺作の比較を行い、絵本のレイアウトと画題に相関性があることを指摘した上でその分類を試みており、極めて実証的である。ここにその一つ一つを記すことはできないものの、論中に示される多くの分類そのものが極めて高い意義を有する。結論としては「守国の意向が尊重される作品には、和漢の画題を分類する意識が認められる」とし、それがレイアウトによって分類されること、近世の絵手本・画譜作品の中でも特異なものであることを明らかにした。そして、こうした事実の積み上げの上に、守国に狩野派に学んだ影響を見出すと同時に、板本を介することによる画題の知識伝達の工夫という啓蒙的側面を見出そうとするのだが、こうした見解は以下の論にも貫かれている。

第5章『絵本通宝志』にみる橘守国の作画法」は、副題に「巻五上「太公望」図を中心に」とあるように、当該絵本の中から「太公望」図をとりあげ、画像としての描かれ方を先行する同図と比較し、守国画における構成要素を見きわめようとする。その結果、「故事に由来した図像」（釣り糸を垂れる、など）と「肖像画的図像」とが取り合わされていることを指摘、その上で、狩野派出身ながら板本の絵を多く手がけた守国が、「民間の町絵師」の需要に応えようとしたと位置づけ、「狩野派の文化が庶民へと流入する構図」を見出そうとする。今後、ここでの例に基づいた主張がより広く他の図像にまで及ぼすことができるか、長期的な調査に基づく続稿が期待される。

第6章「橘守国による作画法」は、多様な図を収める『絵本写宝袋』のうち、武者絵をめぐる論考で、その典拠の一つが『前太平記』であることを新たに突きとめ、さらに複数の板が認められる『前太平記』板本の挿絵と照合した結果、守国が参照したのは平仮名百十三図本と結論づけた。また、守国は単に『前太平記』の挿絵を写したわけではなく、主要人物を拡大したり、それ以外を削除したりするなどの編集を適宜行っていることをも指摘する。ただし、『前太平記』に掲載される説話を題材としたものでもその挿絵に拠らない図もあり、こうした例外的なものの参照元の祖となる図像を狩野元信画『酒伝童子絵巻』に見出し、ここでも狩野派出身の守国の粉本主義が垣間見られることにも論が及ぶ。一方、『前太平記』利用に関しては、『絵本写宝袋』に記載される各場面の概要を記した文章との本文比較も行い、両者における表現の類似を指摘し、『前太平記』を典拠とすることの根拠をさらに強固なものにしている。この点、絵なら絵、文章なら文章と一方の比較にとどまらず、美術史的な手法と国文学的な手法を同時に用いた分野横断的な研究方法が効果的に用いられている。

最後に「結論」としてここまでの論全体の意義を記した上で、同時代と後世の板元と絵師をも視野に入れた今後の研究対象の広がり、さらに基礎調査のさらなる徹底が述べられ

る。さらに付録として「柏原屋出板活動年表」が付されている。

以上、膨大な資料調査に基づき、それぞれの問題に有効な対象を見極めた結果の成果であると高く評価することができる。

論文中、比較的初期に書かれたものは書誌学的整理を目的とする論文であり、この基礎研究があつてこそ論文全体の説得力を高めている。すなわち、個別具体の作品を論じる際にも基盤となる資料群についての把握が十全であることが、叙述と立論に安定感を与えることはいうまでもない。その上で、柏原屋と橘守国という本屋と絵師が、十八世紀の絵本史の流れを考える上での格好な対象であることを見抜いた論者の博搜による着眼点は高く評価できるものであり、板本というメディアがこの時期の視覚文化に与えたインパクトを具体的に明らかにすることに成功しているといえる。

さらに特筆すべきは、ここに書き下ろしの形で掲載されている二編（第1部第3章、第2部第6章）において、それぞれ、複数の書肆とその絵本類を総合的に捉えようとした研究、本文をも視野に入れた絵本研究と、次なる高次の研究段階へと進化を見せている点であり、今後のさらなる飛躍が期待される。

以上、ここで主として論じられているのは柏原屋と橘守国をめぐる問題であり、近世絵本史の一角ではあるものの、本論は、従来全く問われてこなかった事象や問題群について新たにその突破口を見出そうとする意欲的な試みである。欲をいえば、本論文が実に手堅く実証的であることは衆目の一致するところであるものの、今後は絵本通史を明らかにするという大きな目標に関して、出願者の優れた感性・感覚に基づくより自由かつ大胆な発想と論証を大いに期待したい。

本研究全体が世に問われ、今後、日本の視覚文化の解明というスケールの大きな問題意識を備えている出願者の研究のさらなる進展と、この研究分野全体の発展により、江戸時代の絵本についての諸問題がさらに解明されることが期待される。

以上の理由により、審査委員会は、本論文が学位の授与に値すると判断した。